



Title	イスパニア語の音節構造と分綴法
Author(s)	伊藤, 太吾
Citation	大阪外国語大学学報. 1974, 30, p. 41-59
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80506">https://hdl.handle.net/11094/80506</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# イスパニア語の音節構造と分綴法

伊 藤 太 吾

## Sobre la estructura silábica y el silabeo ortográfico del español

Taigo ITO

En este opúsculo se ha esclarecido la relación entre la estructura silábica y su silabeo ortográfico del español. Si bien no se pueda establecer la teoría general que explique la estructura silábica de todas las lenguas, se ha desenvuelto la característica de la estructura así diacrónica como sincrónicamente. El silabeo ortográfico del español, a diferencia de los de unas lenguas europeas, coincide con el fonético cabalmente, es decir, las normas ortográficas que establece la Real Academia Española representan ni más ni menos a las sílabas fonéticas del idioma.

音声学的見地から音節の存在を否定する学者は少くない。例えば、Panconcelli-Calzia は、  
『Querer investigar y fundamentar fonéticamente la sílaba es una utopía.』<sup>①</sup> と言つて、初めから全然問題にしていない様子だし、同様に、E. W. Scripture も音声学的な意味での音節の存在は認めていない。彼の説に寄れば、

『...la syllabe ne saurait être définie, du point de vu physique. La syllabe n'a pas d'existence physique; c'est un concept psychologique.』<sup>②</sup>

であり、言語運用者の心理には音節は存在するが、学問的考察の対象としては認められないと暗黙に主張している印象は拭われない。又同様に、Rousselot も音節の存在に関しては懷疑的である。曰く、

『La syllabe n'a rigoureusement d'existence physiologique que dans les monosyllabe isolé. Autrement, on l'a vu par ce qui précéde, les mouvements organique se lient les uns aux autres sans solution de continuité, et il n'y a pas de point d'arrêt dont on puisse dire d'une façon absolue: ici finit une syllabe et commence une autre.』<sup>③</sup>

以上の学者の外、音節の存在に反対する学者は、有名な人の中にも、O. Jespersen, Von Essen, A. Gemelli, G. Pastori などが見い出されるが、いずれも共通している事は、Margarita Durand

も指摘している如く、オシログラフを用いての震動数の測定とか、スペクトログラフに寄る音色の観測などのいわゆる『科学的実験』に則したもので、一定の発話連鎖内では音ないし呼気の中斷が認められないからという理由に帰せられている。しかし、言語とは、本来、『科学的』なのであろうか。つまり、実験上証明されなければ、音節の *raison d'être* は認められないであろうか。音節という音声学、特に実験音声学に属すると考えられていた分野では、その様な風潮は無理のないことでもあろうが、現に、前述の実験的音声学者の内でも、E.W. Scripture, O. Jespersen, Panconcelli-Calzia, Von Essen etc. の様に、機器測定では認められないとしても心理的には認められるという説は、我々にとって心丈夫である。言語は、その構造が科学的（体系的）であろうと非科学的（非体系的）であろうと、その運用者は決して常に科学的に運用しているのではない、換言すれば、言語の運用には心理が大きく作用するのであるから、言語の音節が心理的に存在するという上記の音声学者の説は、言葉の遊戯に聞えるかも知れないが、音声（学）には音節はたとえ存在しなくとも、言語（学）には十分存在するという事を自ら認めていることになるのであり、しかば、元々存在すると自ら認めている事を（実験）音声学的に認められないからといって、今度は、更に飛躍して、『音節というものは存在しない』という言い方は極めて非論理的である。心理的にではあれ、一度存在を認めているのであるから、その証明が音声学的に不可能なのであれば、更に、心理的とは別の方法でその存在を立証する事ができれば、音節の存在はより確固たるものになるし、又、その必要がある。しかし乍ら、音節の存在を明らかにできない様な種類あるいは段階の音声学を、ただそのことだけで排斥してしまうとすれば、かかる可き学問の姿ではない。

さて、音節が心理的に存在するというのは一体どういう意味であろうか。上記の、音声学的存在は認めないが心理的存在は認めるという説の『心理的』という術語の学問的説明は、実の所、筆者の知る限り、彼らの側からは成されていない。『心理的』という術語は安易に用いられている嫌いがある。つまり、『心理的』という言葉を冠することで、意識しているといふことに係らず、問題から逃避している嫌いもある。つまり、非常に消極的な意味で『心理的』という言葉が用いられているのが判る。しかし乍ら、筆者のいう意味の『心理的』は、反対に積極的なものであり、その根拠は後程、明らかにする。では、一体、音節は存在するのであろうか。それに関して、少しく例を挙げて考えて見たい。文盲の人が少くなりつつある今日、身近な例ではなくなりつつあるが、彼らは、一定の単語（正確には、発話連鎖ないし言連鎖）の発音に際し、音節（後段でその内容を明らかにする）的なのである。ここで文盲の人達の観察は、より有意義である。なぜならば、文字がない方が、言語は起源的に考えてみた場合にも、より自然であるし、同時に、文字に頼って発音すると、文字の性質上、必然的に、意識的人工的分節が行われる可能性が増して来るからである。それは、実は、我々人間の文字体系が音節的になっているからである。世界の文字史上、最も原始的な段階を見てみると、今日非常に発展してはいるローマ字の祖先のフェニキア文字の更に起源と考えられているエジプトの象形文字は、その言語上の性質にも寄るので

はあるが、母音は表示しなかった事は周知の通りである。現代のアラビア語でも、子音しか表示されないが、それは、音節の核としての三つしかない母音をも書く繁雑さよりも、音節の切れ目を表示する音節頭位の文字、つまり、子音を書くことで十分だからである。これらの例は、筆者に言わせれば、消極的な例である。更に文字の上から、今度はより積極的な例示をすれば、アジアの諸言語の書記体系は、ローマ字導入以前は、圧倒的に表音節的文字が多かったのであるが、その中でも特に、中国の（象形）文字は、少くとも音声を表す様になってからは、表音節的であり、今日まで、一つの漢字は一音節を表すのに使用されているし、それを原型として考案された日本語の両仮名も、表音節的である。当然、この様な例は、その言語の音韻構造と深い関係があり、ただ単に文字のみを扱うわけにはいかないのであるが、その様な例として、イベリア祖語が、表音節的であった事をつけ加えておきたい。その様な表音節的文字を有する言語は数多くあるが、これ以上ここでは挙げない。

文字の歴史は、言語の歴史に比すれば、新しいことではあるが、言語の科学が誕生する以前に、上記の様な、消極的並びに積極的な表音節的文字が発明されていたという背景には、言連鎖の直接の下位単位を、音素としてではなく、音節として捕えるという意識が強く働いていたことに外ならない。言語の原型、素型、深層などと呼ばれるものを求める意味合いで、よく、原始的文化の所有者の言語が研究対象になるが、彼らが自身の文字を有している例はあまりないので、書記体系が表音節的であるか否か判然としないが、同時に、同じ目的で、幼児の言語並びに失語症患者などの発音の特徴も観察されるのであるが、明らかに、それらは、音節的なのである。この様に、言語の音韻体系は、歴史的に観察した場合も同様に共時的研究からも、音節的に捕らえられていることが明白になった。その様な文化的遺産を我々は運用しているのであるから、前述の如く積極的な意味で、『心理的』に音節は存在すると我々が言うのは当然であろう。我々の文化の底流に、言語意識の底流に、つまり、『心理的』に音節は存在するのである。

では、存在は認められたとしても、その内容は、一体、何なのであろうか。実は、順序が逆ではあるが、今、その音節の本質の説明に入ろうと思う。予め、断らねばならないのは、本稿の目的は、イスパニア語の音節構造の解明（及びその分綴法との関連性についての考察）であって、言語一般の音節構造を解明するとか、各々異なる言語の音節構造に適用できる普遍音節構造理論などを樹立しようなどとは、毛頭考えていない。土台、異なる歴史を経て来た複数の言語に通じる様な、厳密な意味での普遍文法が、指向されてはいるが、存在し得ない様に、族も系も異にし、異文化を支えて来た言語の音声体系の普遍理論など、あり得ないことではある。しかし乍ら、言語自身の存在目的が同一である以上、たとえその表面上の顕現形に多少の差異はあっても、互に一致する所が多いことも事実として否めないし、言語の本質上、当然のことでもある。そこで、あまり研究の進んでいないイスパニア語の音節の考察に当って、他の言語のそれを援用するのも有効なことであろう。

さて、音節に関する数多くの定義も、大別して、二つの傾向に分類できる様である。その一つ

は、調音方法に重きを置く説で、他方は、主として、聴覚上の印象から定義づける方向にある。とは言え、前者の方法と後者の方法は、ただ特徴を際立たせただけで、お互に入れないので水と油の様な性質では勿論ないし、むしろ、両者は緊密な関係があり、表裏一体を成している。調音の方向で定義付けを試みる場合には、例えば、Roudet の様に、

『una unidad de fuerza espiratoria, delimitada por dos depresiones en ella.』

としたり、P. Passy の様に、

『...la unidad delimitada por disminuciones en el grado de intensidad respiratoria, intensidad constituida por la combinación de fuerza espiratoria+sonoridad.』

としたりで、幾分ニュアンスの差が感じ取れるが、根本的に大きな隔りはない。同じ様な意見の学者が多い。例えば、P. Fouché, M. Grammont, M. Durand などが見い出せるし、イスパニアでは、Navarro Tomás が同じ傾向を辿っている。Roudet の『dos depresiones en ella』とは、Navarro Tomás や Gili y Gaya の術語を借りるならば、intensión と distensión であり、それらの中間に位置するのが tensión ということになり、この様な概念は、実は、聴覚的要素に重点を置く主張と、当然のこと乍ら、術語上の差異はあるが、大いに一致する所が見い出せるのである。その様な聴覚的定義を二・三見てみると、例えば、Sweet は聴覚の頂点の存在と音節とを結びつけていた。概ねこの様な定義と共に存できる説としては、D. Jones, Pike, Hjelmslev, A. Vietor, A. Sommerfelt, A. Rossetti などを挙げることができる。この様に見て來ると、調音方法に重点を置く説の “tensión” と聴覚印象に力点を置く説の “聴覚の頂点”， Saussure の術語を借りれば、“point vocalique” とは、実は、捕らえる側面が異なるだけであって、その指向する所は同じであることが判る。しかし乍ら、残念なことに、簡潔な定義付けを求めるあまり、十分に説明され得ない現象が数多く残ることになる。例えば、Saussure の母音点が存在する所全てに音節があるとすれば、ラテン語の sto, ドイツ語の Stein, ルーマニア語の stie などは、いずれも、現実に反して、二音節の単語ということになりかねない。<sup>①</sup>なぜなら、/s/ や /š/ は、後続の /t/ よりも聴えの度合、彼の術語では、開きの度合い (degré d'aperture) が大きいのだから、母音点を構成し、一つの別の音節と取られるからである。この様に短い单一の文章に寄って複雑な音節構造を定義づけ説明しようとする所に、実は、問題がある様に思われる。歴史的に音声変化を説明する場合にも同じことが言えるのであるが、例えば、カスティリア語の /f/ > /h/ を、ただ、バスク語の加層だけに寄るとか、あるいは、別の観点から、構造的弛緩のみに寄るのであるとかいう説は、複雑な言語の性質からして認めがたいのであり、許容度に大小はあるとしても、この場合、両方の説が変化の原因として認められ得ると考えなければならないのである。その様なわけで、Margarita Durand が

『Toutes ces definitions [groupement autour d'un sommet d'audibilité, suite d'apertures croissantes puis décroissantes, tension musculaire montante puis descendente, pulsation des muscles intercostaux] sont bonnes et une syllabe n'est pas parfaite et stable que si

elle fait coincider en elle toutes ces données, sinon elle est menacée de scission.》

と言うのは正しい。それで筆者も、今まで成された代表的な説を、ここで少し検討してみたいと思う。

まず、F. de Saussure<sup>5)</sup> が、閉鎖 (fermeture) を内破裂 (implosion), 開き (ouverture) を外破裂 (explosion) と呼び、それぞれの概念を区別し明確にしたことは、音節の構造を分析するのに先駆となった。筆者の理解する所に従って、F. de Saussure の説を要約してみると、内破裂と外破裂は、それぞれ、>と<の記号で表わされ、最高の開き度を有する a を除く他の全ての音素は、例えば、p̪ p̫, t̪ t̫, i̪ y̪, e̪ é̪ の様に、内破的にも外破的にも用いられることが可能、両者の中間には、特に開きの度合いの大きな音群、例えば、a m̪ m̫ a, a l̪ l̫ a などに於ける m̪ と m̫ の間、l̪ と l̫ の間には、tenue 又は articulation sistante と呼ばれる中間的位相 (phase intermédiaire) が存在し、そこに音節の切れ目が認められ、さらには、音節を構成する必要十分条件は母音点 (point vocalique) である、というものである。尚、理論的に可能な、内破裂と外破裂との連接の型四種類を挙げているので、検討し乍ら進みたい。

#### (1) 外破裂・内破裂型 (< >)

この連結に於ては、第一音の外破裂と第二音の内破裂の間には、音の中斷がなく、音は連續していて、二個の発声位相(phases phonatoires)はお互に自由に継起できる。例示すれば、サンスクリットの k r t̪ a- に於ける k̪ r̫, フランス語の quitter に於ける k̪ i̪ など、筆者の解する所に寄れば、後段でより明確にするが、この連結構造に一つの音節がある。

#### (2) 内破裂・外破裂型 (< >)

この条件とこの制限での二個の音素連結の不可能性は全くないと言っている。注目に価する所は、

《Sans doute ces moments articulatoires successifs ne se suivent pas aussi naturellement que dans le cas précédent.》

と断っていることである。しかし、残念なことに、『この型は一音節を構成しない』という風に明確にはこの項で記されていないのである。しかし、

《Mais l'expérience montre que ce mouvement d'accommodation ne produit rien d'appreciable, si ce n'est un de ces sons furnis dont nous n'avons pas à tenir compte, et qui ne gênent en aucun cas la suite de la chaîne.》

から判断すると、音節の切れ目が> と <の間にあると言うよりは、むしろ、それを否定している様でもあり、例に s p という連鎖を挙げているが、実際フランス語などでは、spirituel の s p- は同一音節に属するのであるから(イスパニア語の場合はそうでないとしても)、Saussure はむしろ同一音節に属すと考えていたのかも知れぬという印象を受け易いが、Cours の § 4 で、

《Si dans une chaîne de sons on passe d'une implosion à une explosion (> | <), on

obtient un effet particulier qui est l'indice de la *frontière de syllabe*,...»

と述べていることから明らかな様に、境界を設けている。

### (3)外破裂鎧（くく）

二つの外破裂は連続して起ることができるという。しかし、全ての音素が、その性質の如何を問わず接踵的に起るのでないことは、

«...si la seconde appartient à un phonème d'aperture moindre ou d'aperture égale, on n'aura pas la sensation acoustique d'unité qu'on trouvera dans le cas contraire et que présentaient les deux cas précédents; p̄k peut se prononcer (p̄ka), mais ces sons ne forment pas chaîne, parce que les espèces P et K sont d'égale aperture.»

を読みば判る。むしろ、この様な種類の音素連接は(2)に属すべき性質のもので、前項で指摘した様に、異なる音節に属する二ヶの音素連続であることが判る。如何なる音素連続が同一音節に属するか、又、同一音節に属せない音素連続は何であるかについては、筆者が後段で明らかにする。

### (4)内破裂鎧（くく）

上と逆の規則に寄るのは当然である。ある音素が、後続のものより開きの度合いが大きい場合は、自然な、つまり、滑らかな連続である。後続音素が先行音素より開いているか、又は、開度が同等の場合は、連続性は薄れる、否、むしろ中断される場合もある。だから、à s̄ita の s̄i は ch-a-pka の p̄k と同じく連続しているとは言えない。

以上見て来た四項目に、例の母音点の概念を加えれば、Saussure の音節構造に関する考え方との境界の設定方法は明らかである。しかし、より良き理解の為に、開きの度合い (degré d'ouverture) についての Saussure の考えを示す必要があろう。今日では、一音素の定義づけをするのに、例えば Gili y Gaya® の言う様に、

acción de la laringe (sordas y sonoras)

acción del velo del paladar (buceales y nasales)

punto de articulación

modo de articulación の四点を考慮するのが常識になってはいるが、Saussure 流の方法も、少くとも、今我々が問題としている音節（域の設置）に関しては、十分、存在理由がある。

«On classe généralement les sons d'après le lieu de leur articulation. Notre point de départ sera différent. Quelle que soit la place de articulation, elle présente toujours une certaine aperture, c'est-à-dire un certain degré d'ouverture entre deux limites extrêmes qui sont: l'occlusion complète et l'ouverture maximale.»

この説は、明らかに、聴覚印象の強度に応じているものである。聴覚印象のみに頼るのは片手落ちだということは、すでに指摘したのであるが、その印象をどの様に捕えるかで、実は、問題も変って來るのである。<sup>①</sup>

さて、母音とか子音とかの概念の区別は、Saussure にとっては、口腔調音 (l'articulation buccale) の見地からすれば、立てる必要はなく、音節に於て機能を果す概念は、自鳴音 (sonante) と共鳴音 (consonante) だと言っているのであるが、その結果分けられた七種類の段階が如何なるものか見てみよう。<sup>⑧</sup>

#### A. 開度ゼロ：閉鎖音

『Cette classe renferme tous les phonèmes obtenus par la fermeture complète, l'occlusion hermétique mais momentanée de la cavité buccale.』として、脣音型の p, b, m, 齒音型の t, d, n, 喉音型の k, g が挙げられている。

### B. 関度1：摩擦音が入る

『Fricative ou spirantes, caractérisées par une fermeture incomplète de la cavité buccale, permettant le passage de l'air』と言つて、f, v, ð, s, z, ſ, ſ̄, x, rなどを挙げている。

### C. 開度 2：鼻音

### D 關度 3：流音

これは、側面調音と振動調音に分け、顯現形は l, r などである。

F 關度 4 :

i, uなどの、他の母音に比べて、閉鎖を伴うもので、一般に半母音と言われるもの。

### F 開度 5 ; e. o

以上が、Saussure の聴覚印象の強度別による音素の分類であるが、多くの示唆に富んだものであり、たとえ、今日そのまま受け入るわけにはいかなくても、言語学史上、画期的なものであったことは、積極的に認められねばならない。しかし、Saussure の記述は非常に短い為、誤解が生じないまでも、不備な点を見つけ出そうと思えば容易に見つけ出せる為、より完璧なものが求められた。特に、開度の分類に関しては、数多くの修正案が出された。英語の子音を、Malone が、閉音  $p\ t\ k\ b\ d\ g$   $m\ n\ ŋ$ 、脣部開音  $f\ v\ w$ 、舌部開音  $\theta\ s\ \int\ \tsh\ z\ \tsh\ j\ r\ l$  などと分類したのも、その表れの一つであるが、直接、開度に関して成されたものの中にも、残念乍ら、幾分、差異が見られる。その一つとして、Grammont は、<sup>⑩</sup>

0 度 閉鎖 p t k b d g

1度 摩擦 f v ð s z š ž g x

## 2 度 鼻音 m n ŋ

3度 流音 1r

#### 4 度 半母音 j w

5度 母音 i u ü 及び、対応する鼻音と氣息音

6 度 母音 e o ö 及び、これらの鼻音と氣息音

7 度 母音 a a 及び、氣息音の ha

の様な実際の音素を挙げていて、明らかに、フランス語の音素であるという特殊事情もあるが、Saussure の分類とは異なる。これに対し、Gili y Gaya は、『En español habría que distinguir entre las semivocales de Grammont (grado 4), las semivocales i, ü, de las semiconsonantes, j, w, estas últimas de articulación más cerrada.』と指摘しているが、当然のことである。なぜならば、音節頭位と尾位では、後述する様に、/J/ と /W/ の大音素は、それぞれ j, w と i, ü の形で区別されて現われるからである。さて、筆者には、多くの説<sup>④</sup>の内、H.Lausberg<sup>⑤</sup>の分類が最も実際的であると思われる所以、それを援用したい。

1<sup>er</sup> • grado : oclusivas orales p t k b d g

2<sup>o</sup> • grado : fricativas sordas f s (ç š) [x] [č] [θ]

3<sup>er</sup> • grado : fricativas sonoras (v z ž) y [w]

4<sup>o</sup> • grado : oclusivas nasales m n ñ (ŋ)

5<sup>o</sup> • grado : laterales y vibrantes l λ (L) r (R)

6<sup>o</sup> • grado : semivocales i ü (ü)

7<sup>o</sup> • grado : vocales en el siguiente orden:

a) Vocales de pequeño grado de abertura i u

b) Vocales de grado medio de abertura e o

c) Vocal de máximo grado de abertura a

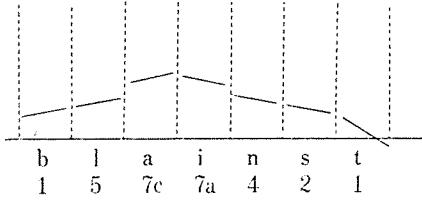
N. B. Las vocales nasales tienen un grado mayor de perceptibilidad que las correspondientes vocales orales.

以上が Lausberg の分類であるが、イスパニア語の音素と筆者が考へないものは（ ）で示し、新に必要と考える音素は〔 〕をつけて加えた。尚、第一度にある b d g は母音間で摩擦音として、つまり、b dg として現れるが、その様な例は、前者の異音として捕えることができるし、又、音節構造の解明にはそれ程必要でない為と繁雑さを避ける意味で、筆者は、敢て省略した。又、同一度にある音素が全て同一の強度の聴覚印象を与えるのではない、例えば、θ と č は決して同じ効果を出すのではないことは承知しているが、他の音素との関係で、特にこの様な類別では問題にならないし、又、この分類では、筆者は、音節頭位に於ける大音素を示したこととする。<sup>⑥</sup>

では、H. Lausberg の音節域に対する考えはどうであろうか。§93から引用すると、

『La sílaba comienza con el punto más profundo del valle, y abarca (dado el caso) la subida, (necesariamente) la cúspide así como la bajada, si la hubiere.』

と言っている。この内容をより良く説明する例は、Lausberg 自身が挙げているものよりも、Gili Gaya<sup>⑦</sup>のものの方が良いので、筆者が度数を加えて、転写すると、



の様になる。勿論これはイスパニア語の単語ではないが、原理は同じで、一音節の構造である。

さて、Lausberg にもどると、

『En inicial absoluta la sílaba puede comenzar también directamente con la óúspide.』

と言っているが、これは、o-ro などの例で明らかである。しかし、

『Nótese que tiene valor de regla completamente natural el hecho de que una sílaba pueda comenzar con un grupo de consonantes capaz de ir (en la lengua respectiva) al comienzo de palabra, por tanto:

p a / t r e m (cf. tres), pero;  
1 7c 1 5 7b 4

a c p / s a  
1 7c 1 2 7c (pues ninguna palabra genuinamente latina comienza por ps-)』

の個所は、非常に大きな問題を呈していて、長年議論の対象になっていたのである。実は、

Saussure も同じ困難に遭遇して、

『...dans un groupe a r d r a, la chaîne n'est pas rompue, qu' on coupe à r d r à ou à r d r à, puisque à r d, chainon implosif, est aussi bien gradué que d r, chainon explosif.』

(イタリックは筆者) と言い、イタリックの部分は厳密に言えば自身の理論に矛盾するのであるが、少くとも、境界の設定は正確には成されていなかった。Andrés Bello® も Lausberg と同じく、単語の頭位に来れない音素は、語中の音節頭位には来れないとして、París や morir を、それぞれ、Par-ís,mor-ir と切っている。これについては、後段の分綴法でさらに検討する。

扱て、Lausberg は §94で、s c r i p/t a の説明で、sからcへの聴覚印象度の減少を伴う  
2 1 5 7a 1 1 7c

移行は、ドイツ語の Skala やイタリア語の scala の様に必ずしも音節の分離を示すものではないと言っている。理由は、s が完全に有効な音声的頂点 (cúspide sonora) を形成しないからと言うのであるが、開度の大きい s の方が音節核を成さないというは自らの分類方法に則ないので納得しかねるが、実はこれは、筆者の考えでは、強アクセントの位置を加味すれば解決できることである。しかし、この強アクセントの影響も全ての言語に現れるとは限らない。それは、一般に、アクセントが比較的強い言語、つまり、ゲルマン系の言語に多い様に思われるし、又、アクセンドが比較的弱いロマンス系言語の中でも、正常な歴史的変化をしたのでない教養語には、同様にアクセントの影響があると考えられる。だから、S-ka-la も s-ca-la も、それぞれ、二音節目の a にアクセントがある為、開度に一度しか差がない s が、第二音節に吸収される結果

になったと考えられる。あくまでも、民衆語の心理としては、sc- (cs の様に配列が逆になれば、話は別) が二音節に属していることは、*s i c r i p t a* や *s i p i r i t u s*<sup>®</sup> の様な挿音現象に寄っても明らかである。この挿音の i は、*Ingalaterra* や *corónica* の列に見る様に、同化だけが原因でないからである。であるから、イスパニア語に於て、*e s c r i t a* の如く、元々一つの音節を構成していた s を補強する意味で e を頭位に添加するのは、当然の帰結といえる。何となれば、ゲルマン系言語と異り、特にイスパニア語では、アクセントが弱いということ並びに摩擦の程度が強く、s は特殊な調音で成され、発音に要する時間が他の殆んど全ての言語に於るより長いという事実に寄るのである。その為に、語尾の s は、メキシコやキューバでは鼻音化する程である。尚、新しい外来語を導入する場合、この様な流音の s (*s líquida*) の前に e を添加するのは発音を容易にする為だと一般に説明されていることとは、実の所決して、矛盾しないのである。又、添加音 e は、歴史的に見ると、当初は、i であったのだが、極度に鋭音である為と、次の s に開度を一致させて e になったのであり、他の母音は来ない理由はここにある。この様にすれば、*e s c a l a* が三音節語であることは、誰の目にも明かである。実に、一言語の特性に寄って、音節数は決るのである。

さて、Lausberg や Gili Gaya の音節域は、大筋に於て一致しているのであるが、Gili Gaya が『Hay que añadir que la mayor o menor perceptibilidad de los fonemas no depende sólo de su naturaleza, sino que, como hemos dicho antes, está condicionada también por su intensidad, duración y tono.』

と言っていることは、Lausberg より一步前進したものであると言える。そして、我々は、すでに、アクセント<sup>®</sup> については、Lausberg の説を修正するのに考慮したし、あとは、duración と tono を顧慮すべきなのであろうが、これらは実は、特に古典語の段階では重要であったが、現代イスパニア語の音節研究には、それ程必要でない。ここで別の観点から解釈すると、Gili Gaya が意図したか否かは別としても、音節は、一つの単語の直接の構成要素としてではなく、複数の単語からも成り立つ一つの音声（又は言）連鎖の直接の構成要素として捕えた方が、より正確であることに思い至る。時として、その様な連鎖は一つの単語と同じ場合もあり得るが、決して混同されてはいけない。又、我々の術語では、音素とは、その様に見た場合の音節を構成する下位単位であって、決して、単語の直接構成要素ではない。

ではここで、B. Malmberg に *la structure syllabique de l'espagnol*<sup>®</sup> という論文があるので、少し検討して、その後、我々の結論を出したいと思う。Malmberg に寄ると、A. Alonso は *Una ley fonológica del español* という論文で、音節尾位では、頭位にあっては対立する音素の区別が消失するという意味のことを述べているという。この現象は、実は、プラーグ学派の術語では、neutralization と言われるもので、筆者も、イスパニア語の口蓋子音の生成に関する考察<sup>®</sup> で、その様な事実に着目したことがあったが、ここでは更に、衍敷してみたい。扱て、語頭では、m, n, ñ は異なる三つの音素として認められていることは明かである。しかし、これらの音素は、内

破裂の位置では同様に混同されて、一つの大音素の異音ということになるのである。例示すれば、*un paso* では bilabial であり、*un farol* では labio-vélaire であり、*un cesto* では interdental であり、*un lado* では apicoalvéolaire であり、*un llanto* では palatal であり、*un campo* では vélaire である様に、次の音素に極めて容易に同化しているのである。Malmberg は、同様な例として、尾位では、*cultismo* に分類される様な単語に於ても、区別はあまり行われないとして、ínterin, Belén, Jerusalén などの m が n で代用されている例を挙げているが、その様な例は、Adán, colcrén etc. をはじめ、まだ多く存し、実に、イスパニア語の特徴である。この様な尾位の鼻音の機能の弱化は、Navarro Tomás<sup>⑩</sup> も認めていて、

«En contacto con una consonante siguiente que no sea alveolar, la n pierde su propio punto de articulación, asimilándose al de dicha consonante.»

と言っている。又、さらに、Malmberg は、

«...on sait que dans les groupes savants ins-, cons-, trans-, la nasale subit un affaiblissement qui dans une prononciation rapide et négligée peut aller jusqu'à la disparition complète ou qui, souvent, ne se réalise que sous forme d'une nasalisation de la voyelle précédente.»

と言っていて、いかに尾位では等閑な発音が行われているかが判る。同様に、Navarro Tomás<sup>⑪</sup> も、

«...la conservación total de la n en dichas sílabas tiene un carácter afectadamente culto; su pérdida es constante en el habla popular;»

と言っている。この様に、尾位の発音があいまいにされている、或いは、あいまいで良いという原因・理由はどこにあるのだろうか。これについても、もうじき結論を出すが、今しばらく、その様な例を挙げてみよう。

さて、頭位に r と rr (=R) の対立がないのは、一口に言えば、r が R に編入されたからであるが、逆に、尾位に於ては r と R の区別が成されないのは、今度は、R が r に編入されたからなのである。又、その様な例は他に数多くあるが、頭位に於る ll と l の区別は認められるが尾位では（尤も、尾位の ll は普通のイスパニア語にはないが、音節構造に対する意識を考察するのに、この場合、役立つ）、カタロニア語では -ll と -l は区別されると言えは、民衆のイスパニア語では、detall をはじめ、特にフランス語からの借用語などでは、-ll は -l である。又、多くの方言では、尾位の -l は -r と混同されるという事実はあまりにも有名であるし、-d が、即ち摩擦音としての -d (θ の表記が適切である) が -r と区別できないのも民衆の耳であり、二人称複数命令形 amad が amar という不定形と同形になるのも、あいまいな発音が許容される例である。<sup>⑫</sup> 反対に、-r>-d には決して成り得ない。Henríquez Ureña<sup>⑬</sup>によれば、porqué>poiqué, comer>comei や、ultracorrección の例で、narde <naide <nadie, sor <soy, あるいは、後続者への同化の例として、verde>vedde, cagra>cagga, alma>amma etc. などが方言に多いという。<sup>⑭</sup> この様な事実は、

一体、何を物語るのであろうか。我々が思いつくのは、Saussure や Lausberg などの聴覚印象に寄る開度の図である。r>i は、5>7a の移行であるから、明らかに、聽えが大きくなる。言い換れば、閉鎖度がより小さくなつたことを示すのである。又、後続の子音への同化にしても、同様に、自己の存在を否定したことになる。これらの二つの事実は、前者は、積極的に、後続子音つまり音節頭位の子音と尾位にある自身の聴覚印象度をより大きくすることによって、両者の差異を著しく、音節の境界を明確にする例であるし、後者の後続子音への同化の現象は、同じ目的の消極的な例なのである。音節の境界の設定は、上述の如く、通例は、二種類のうちどちらかで行われるのであるが、これらの二種類のうちでも特に積極的な方の例が多い。foot : food, dock : dog の区別は民衆イスパニア語ではできないし、-d や -z が共に -θ になるのも、念の為に言えば、同じことなのである。又、r が l, n, s に後続する場合は R に変るというのも、l, n, s は尾位にあり、しかも、頭位の r と聴覚印象があまり変わらないが為、r を、より閉鎖の強度な印象を与える R<sup>④</sup> にすることに寄って、境界が明確になるからである。その他の例として、ə を尾位と頭位との間に挿入することで開度の差をつける方法については、前述した通りである。この様に見していくと、音節構造の何であるかを考察する場合、その境界がどの様に意識されているかを知る方が先決の様である。

我々の意見は、今まで述べたことで明かであろうが、尾位の発音は明確でなくても良い、更には、明確でない方が良いということになろう。しかし、反面、頭位では極めて明確にする必要がある。つまり、頭位が明確であれば、即ち、どこで音節が始まるか明白であれば、尾位は明確でなくとも、即ち、どこで終っているかが不確かでも、一向にさしつかえがないわけである。ここで筆者は、『明確』という言葉を、閉鎖度が強いということと同意義に、又、『明確でない』若しくは『あいまい』という言葉を、閉鎖の度合いが少い、つまり、開度が大きいということと同意義に使って来た。だから、音節頭位には、我々の聴覚印象別の開度を使えば、できる限り数字の小さいものが来るのが望ましく、反対に、尾位には、数字の大きなものが来るのが望れるわけである。そして、尾位に k の様な閉鎖の強い音素が来ると、特に、同様に閉鎖度の強い音素が後続する場合は、その内破音は崩壊するのである。だから、歴史的に見ると、NOCTE> \* noite> noche, OCTO> \* oito> ochos, OC'LU> \* oilo> ojo etc. に見られる如く、/k/ は尾位にある為に、同時に大切なことは、アクセントのある音節の尾位にある為、ヨッドと化すのである。<sup>⑤</sup> 実は、このアクセントの位置は、非常に重要である。ここで、前述の Saussure, Lausberg, Gili Gaya の連続の公式を思い出そう。連鎖が滑らかであれば一音節を構成し、更に、滑らかであっても分け方には少くとも複数の方法があるということであった。その様なわけで、NOCTE, OCTO, OC'LU の様な場合は話が簡単である。つまり、-kt- の音連鎖は、共に開度が一度の為、滑かとは言えないから分断されているのである。OC'LU の場合は、コンマが示す様に、1.5度ではあるが、分断されているのである。しかし、問題は、digno, significa, técnica などの1.4の連鎖である。これは、数字が示す通り滑かであるから、当然一音節に属すべき連鎖であろうし、そ

の場合は、今までの我々の記述からすれば、di-gno, si-gní-fi-ca, té-cni-ca とすべきであろうが、ここで結論を出す前に、16世紀のイスパニア語を知る上で極めて貴重な作品である Juan de Valdés の *Diálogo de la Lengua*<sup>9</sup> でのこの問題に関する陳述<sup>10</sup> を見よう。

«...cuando escrivo para castellanos, y entre castellanos, siempre quito la *g* y digo *sinificar* y no *significar*, *manífico* y no *magnífico*, *dino* y no *digno*, y digo que la quito, porque no la pronuncio, porque la lengua castellana no conoce de ninguna manera aquella pronunciación dela *g* con la *n*, y veréislo, porque no dice *segnor*, sino *señor*, sirviéndose de la tilde adonde vosotros os servís de la *g*, de manera que, quando bien yo quissiese que el castellano pronunciasse como vosotros el *manífico* y el *sinífico*, pornía en lugar de vuestra *g* nuestra tilde, como hago en *iñorancia*, y diría *mañífico* y *siñífico*.»

ここで見られる様に、digno, magnífico などの聴覚印象度が一である *g* が発音されないのは、我々の開度数別配列にそもそも問題があるのだろうか。しかし、例の配列は、前述の如く、大音素の頭位に於ける考察なので、今ここで *n* を一にし、*g* を四にする様な必要は全くない。理由は二つ考えられる。一つは、*gn* という音素連鎖は、本来のラテン語やイスパニア語には存在しないということ。更に、M. Pidal<sup>11</sup> が、

«...de igual modo se pronuncia *g* (fricativa) cuando va agrupada con otra fricativa; *agrado*, *amargo*, *siglo*, *algo*, *agua*, *muy guapa*, *juzgar*, y también es fricativa cuando precede a una oclusiva nasal: *ignorar*, *magnífico*.»

と言っていることから判断すると、*gn* の連鎖に於ては、*g* の摩擦音の聴覚印象の方が大きく、反対に、*n* の鼻腔での閉鎖性が強くなり、その為、*g* は前の音節に属し、*n* は頭位になるのである。この様に、ある音連鎖が頭位に来れるかどうかは、やはり、決定的とまでは言わなくても、重大な要素である。

さて、頭位に閉鎖性の強い子音が来る程、音節の境界線が明確になるから、尾位はそれだけ不明確性が許されるということは前に述べた通りであるが、イスパニア語には本来、頭位の子音を強めるという傾向があり、それが長い歴史を通じて行われている様に思われる。つまり、ゴート語の *werra* > *guerra* の類に見られるのである。*w* よりも閉鎖度の強い *g* を頭位に用いることによって、より明確に境界線を示すことができたわけであった。同様に、*wardôn* > *guardar*, *warnjan* > *guarnir* は補強の例であるし、*hēlm* > *yelmo* に於ける *y* の現れは *i* の補強を示すものである。又、*wisa* > *guisa*, *wardja* > *guardia* も同例である。*w* と *g* は調音点が似ている為に、より閉鎖度の強い *g* が選ばれたのである。さて、ゴート語の単語がこの様に頭位の補強を受けているのであるが、黄金世紀の言語を見る意味で、Valdés をあと一度引用しよう。<sup>12</sup>

«Otra cosa observo, que si el vocablo comienza en *u* vocal y después de la *u* se sigue *e*, yo pongo una *h* antes de la *u*, y assi digo *huevo*, *huerto*, *huesso*, etc. Ay algunos que ponen *g* donde yo pongo *h* y dizen *güevo*, *güerto*, *güesso*; a mí oféndeme el sonido y

por esso tengo por mejor la *h*.»

この様に、いくら Valdés が *h* の方を *g* より好むとは言え、*h* を添加すること自体、我々の頭位子音補強の理論を証明するわけで、まして、*g* を添加する例があると言っているのは、いかにこの音素が、いつの時代でも閉鎖の代表とされているかが判る。この *g* は、しかし、耳に聴いて心地の良い音でないことは認めざるを得ない。Valdés<sup>⑩</sup> も、

«Aún juegan más con la pobre *h*, poniendo algunas veces, como ya os he dicho, la *g* en su lugar, y así dicen *güerta*, *güessa*, *güevo* por *huerta*, *huessa*, *huevo*, etc., en los cuales todos yo siempre dejo estar la *h*, por que me ofende toda pronunciación adonde se junta la *g* con la *u*, por el feo sonido que tiene.»

と言って、そのことは是認しているのであるが、この Valdés の発音を受けて、Pacheco が、

«Assí es verdad, que el sonido es feo, pero como véis es más claro.»

と言っている所から判断できる様に、耳に聴いて心地良くなき音であるが由に、『より明か』なので、添加音の代表となるのである。さて、実は、ゴート語の要素が混入した時代や黄金世紀のみにその様な現象が見られるのではないのである。方言学の手引書を繙くまでもなく、添加あるいは代用の音としての *g* は広く行われているのは周知の事実である。

今まで考えて來たことで、ほぼ、イスパニア語の音節構造を明かにできたと思う。勿論、例外的な現象もあろうし、他の外国語の音節構造と一致しない点が多い。同じ西ロマンス語の一員であるフランス語の音節構造は、G. F. Arnold の A Phonological Approach to Vowel, Consonant and Syllable in Modern French, Lingua vol. 5 によれば、

Type	Initial	Final
C V	252	248
V C	179	186
C C	38	53
V V	27	33

であり、調査方法自体少し異なるのであるが、N. Tomás の Studies in Spanish Phonology に寄れば、

C V	58.45%
C V C	27.35%
V	5.07%
C C V	4.70%

であるという。フランス語と比較する紙幅はないが、この様な構造についての今までの我々の考察を、不足は補って纏めてみよう。

«音節には一つの頂点（母音点）がある。サンスクリットや英語などでは流音が母音点になることもあるが、イスパニア語の場合はない。母音は一音節内で三つまで連続は可能であるが、四

つ以上は不可能である。一つの音節は母音で始ることもあるが、これは例外的で、しかも、語頭に限られる。尾位は、反対に、母音的（度数の大きな）音素で終る。閉鎖音でも、尾位の内破音になると、極端に音価が弱まる。二つ以上の子音（閉）音素が連続する場合、音節の境界が不明確な時は、その連鎖が語頭に実際に来るか否かで、一音節に属すか否かが決定される重大な要素となる。だから、例えば、dig n o は、g n という連鎖はイスパニア語の単語の語頭には存在しないから、g-n と分れ、g は内破裂音と化し、音価は弱まる。しかし、とは言え、逆は必ずとも真ならずで、語頭に来ない音素は音節頭位に来れないということはない。すでに言及したことではあるが、querer, morir, París etc. に見られる語中の /r/ は確かに語頭には来ない。そして、語尾即ち音節尾位に来ることは事実である。しかし、すでに述べた様に、イスパニア語の単語の構成は、母音で始るのは語頭にある音節頭位のみで、語中の音節頭位の例がなく、イスパニア語らしくない。『イスパニア語らしさ』ということは、言語の心理にとって極めて重要なことである。又、例の開度からしても、re, ri の方が、r-e, r-i より自然である。イスパニア語の三音節の単語の音節構造を図で示せば、



が代表的であろう。つまり、一音節目が母音で始り得る（必ず始るのでない）ことを示し、尾位はあいまいで良いということであり、二音節からの頭位は明確でなければいけないということである。』

では、この様な音節構造を持つイスパニア語が分綴される場合、どの様な正書法上の取り決めがあるか、又、それらは、音声学的分節と一致しているか否かを、以下、制限紙幅の許す範囲内で考察したい。まず、11世紀も終らんとする頃ローマ字表記が決定されて以来、イスパニア語の正書法の歴史で最初に注目すべきは、Alfonso X の著作物であり、今日の正書法の原型がすでに見られるとは言え、やはり、ラテン語的であることは否定できないし、『成文法』の形で成っていないから、どの様な配慮があったのかは明確でないが、いずれにしても、分綴法についての規則性を知ることはできない。次に注目されるのは、やはり、ロマンス語文法の最初の創設者と言われる Antonio de Nebrija の Gramática Castellana である。しかし乍ら、正書法に関する記述が多いのであるが、そのいかなる部分にも、今我々が問題にしている分綴法に関する論述は見当らない。その次に古いものは Valdés の Diálogo de la Lengua (1536), Gramática castellana por el Licenciado Villalón (1558), Gramática de la lengua vulgar de España, (Lovaina 1559) などがあるが、同様に、いずれも我々の分綴法は扱っていない。まだ手書きの時代であったことにもよるが、最初に現れるのは Academia の Diccionario de Autoridades の discurso proeminal de la orthographía de la Lengua Castellana に於てであろう。現代風のローマ字体で転写すると、

『A estas se añade la división ó raya figurada assi(-), que se pone al fin del renglón quando se promedia la palabra, para que se conozca que no está acabada, y que parte de

ella passa al renglón siguiente: como en estas *Ortho-graphía, Doctis-simo,...*»

そして、初めて規範的な例を挙げている。

«El modo de dividir las palabras en esta ocasión, es seguir el mismo que se tiene en el deletrear, poniendo las consonantes en cada renglón con la vocál que les toca, y no invirtiendo el orden, de suerte que en el primer renglón se halle alguna consonante, que toque en el modo de deletrear, y en la pronunciación al renglón siguiente, como esta voz *Animo* se puede cortar assi *A-nimo* ó *Ani-mo*, y se cortará mal assi *An-im-o*, ó assi *Anim-o*. Esta regla es mui clara, y tambien lo es, que quando en el renglón se llega à cortar la palabra en ocasión en que concurren dos *ss*, ò dos *rr*, ò otra letra duplicada, se debe escribir la una letra en el renglón primero, y la otra en el segundo. Este común precepto y uso se funda en que por lo general quando hai esta duplicación la priméra consonante se pronúncia con la vocál que sigue: y assi *Acción*, *Doctissimo* se deben partir de este modo *Ac-ción*, *Doctis-simo*. Por esta razón las dos *ll* se deben poner siempre en el renglón segundo, porque su pronunciación es con la vocál que les sigue.»

この中にすでに今日の正書法の原則的なものが窺える。しかし、今日は、*rr*に関しては、Academia自身も異なる表記をしている。*parra*, *cerro*の様な単語はもとより、*andarrío*, *contrarréplica*の様な合成語でも、*r-r*の分綴はしないのであるから。<sup>⑩</sup> 次に、Academiaの分綴法に関する今日の記述を見よう。

1. Cuando al fin del renglón no cupiere un vocablo entero, se escribiría sólo una parte, la cual siempre ha de formar sílaba cabal. Así, las palabras *con-ca-vi-dad*, *pro-testa...*
2. Como cualquier diptongo o triptongo no forma sino una sílaba, no deben dividirse las letras que lo componen. Así, se escribiría *gra-cio-so*, *tiem-po no-ti-ciais...*
3. Cuando la primera o la última sílaba de una palabra fuere una vocal, se evitará poner esta letra sola en fin o en principio de línea.
4. Las voces compuestas de la partícula *des* y otra voz se han de dividir sin descomponer dicha partícula; como en *des-ovar*, *des-am-pa-ro*.
5. En las dicciones compuestas de preposición castellana o latina, cuando después de ella viene una *s* y otra consonante además, como en *constante*, *inspirar*, *obstar*, *perspicacia*, se han de dividir las sílabas agregando la *s* a la preposición y escribiendo, por consiguiente, *cons-tan-te*, *ins-pi-rar*, *pers-pi-ca-cia*.
7. La *ch* y la *ll*, letras simples en su pronunciación y dobles en su figura, no se desunirán jamás. Así, *co-che* y *ca-lle* se dividirán como aquí se ve. La *erre(rr)* se halla en el mismo caso, y por ello debe cesar la costumbre de separar los dos signos de que consta, y habrán de ponerse de esta manera: *ca-rre-ta*, *pe-rro.*»

この規定を、1952年の *Muevas normas de Prosodia y Ortografía* では、4を改正し、1のaに編入させ、

『...cuando un compuesto sea claramente analizable como formado de palabras que por sí solas tienen uso en la lengua, o de una de estas palabras y un prefijo, será potestativo dividir el compuesto separando sus componentes, aunque no coincida la división con el silabeo del compuesto. Así, podrá dividirse *no-sotros*, *nos-otros*, *de-samparo* o *des-amparo*.』

と言い、その上、4に新たに、

『Cuando al dividir una palabra por sus sílabas haya de quedar en principio de línea una *h* precedida de consonante, se dejará ésta al fin del renglón y se comenzará el siguiente con la *h*: *al-haraca*, *in-humación*, *clor-hidrato*, *des-hidratar*.』

を加えている。Martínez Amadorはこの改正案に対して賛意を表している。

『Con esta decisión de la Academia estamos conformes, pues harto complicada es ya nuestra ortografía para que no se procure simplificarla todo lo posible. En castellano no hay razones fonéticas que obliguen a apartarse del concepto general de la sílaba como ocurre, por ejemplo, en inglés (*deprecative*, *profan-ity*, *prog-ress*), ni pueden aducirse razones etimológicas para conservar una división difícil y peligrosa, ni por último deben medirse con distinto rasero unas y otras voces.』<sup>8</sup>

*nos-otros*と*no-sotros*の両方を採用したのは、実際の発音と語源意識を考慮した結果である。例外はない方が良いのであるし、Academiaの認めている接頭辞に限る例外にも厳然たる規則は認めていなく、説得力のあるものとは言えないという不平もある。処で、Academiaの文法記述はA. Belloに寄る改革が多いと言われているが、前にも述べたことではあるが、*amar-ia*, *cur-ia*, *delir-io*, *Par-ís*, *mor-ir*などをAcademiaが採用しなかったことは、遅れがちな体制の中で評価される可きことであろう。しかし、上の引用が、今日行われている分縫法の全てを言い尽しているわけではないので、H. Ureñaから補充すると、

- 『a) Cuando hay una consonante sola o grupo de licuante y líquida, entre dos vocales, debe unirse a la vocal segunda: *a-ve*, *o-ro*, *a-trio*...  
b) Cuando hay grupo de dos consonantes, que no sean licuante y líquida, la primera pertenece a la sílaba que va primero y la segunda a la sílaba siguiente: *dig-no*, *ap-to*, *doct-or*, *in-noble*...  
c) Si concurren tres consonantes y las dos últimas no son licuante y líquida, las dos primeras se unen a la sílaba que va primero y la última a la siguiente: *obs-tá-cu-lo*, *cons-ti-tu-ción*.

Cuando hay licuante y líquida: *as-tro*, *In-gla-te-rra*.』

しかし、残念乍ら、H. Ureña も nos-o-tros だけを認めているのである。繰り返しになるが、Bello が、*sub-lu-nar*, *sub-ro-ga-ción* であって、決して、*su-blu-nar*, *su-bro-gación* でないと断言しているのは問題である。というのも、sub- という接頭辞が、常に一般民衆に、分離された単語の構成要素であると認識されているとは限らないからである。

この様に見て來た場合、(f, p, b, t, d, k, g)+(l, r) が分断されないのは、前半の発音の開度に際して述べた様に移行が滑かだからという理由に寄るものであり、*trans-* に於ける尾位の-ns も段々と開度が滑らかに小さくなるけれども、依然高開度であるという如く、音声学的理屈に叶った分綴法が行われ得ることは、他の外国語と比べて見た場合、大いなる驚異であろう。

ここで制限紙幅が尽きてしまった。前半の音節構造の型に関する考察も、純粹に音声学的見地からすれば、明かに不十分ではあるが、本稿は、正書法上の現行の分綴法との実際の発音の関係を明かにする以外の目的ではないので、音節構造の型に関する定義を下す必要もないし、又、何らかの定義を短い文章ですると、結果、思わぬ例外が飛び出して来る。実は、初級文法の最初の項目に上記の如き分綴法が出て来るが、なぜその様な分綴法が生じたのかを明かにしたく思ったのが、本稿の出発点であった。ただ、しかじかの規則があるから覚えろと言うだけでなく、規則の生れる理由を明かにする目的で本稿を書いたのであるが、分綴法を列記してある上に引用した書物にはその理由は書いてなかった。否、『発音通りに分綴する』という意味のことは、Academia などには書いてあるが、その発音自身どの様なメカニズムに寄るのか、主として、音節のメカニズムは何かを明かにすることによって、正書法上の分綴法の成り立ちを明かにできたと思う。

(1973. 7. 9)

(注)

- 1) Bohuslav Hála, *La sílaba, su naturaleza, su origen y sus transformaciones.* pág. 3. C.S.I.C. Madrid, 1966.
- 2) A. Rosetti, *Sur la théorie de la syllabe*, pág. 10. Mouton, 1963.
- 3) A. Rosetti, *ibidem* 9. Germán de Granada Gutiérrez, *La estructura silábica*, pág. 32, Madrid. 1966.
- 4) 所が、実際には、この様な記述は Saussure にはないことは断っておく。
- 5) *Cours de Linguistique générale*, pág. 63—95. Payot, Paris. 1969.
- 6) *Elementos de Fonética General.* pág. 74. gredos. 1966.
- 7) Stetson の Motor Phonetics などでは、呼気の弾道力が基本であると言われているが、それは音声学的、生理学的メカニズムを問題にする場合に必要なのであるが、筆者は、言語の運用時に於て、一般発話者は聴覚印象を大事にするという事実を重視したい。つまり Gili Gaya の上記の四事項は、聴覚印象で代表できると考える。
- 8) この要約は、イスパニア語を考える上で必要なものだけに限り取り出し、その結果、Saussure の不利になる様な記述は一切していない。
- 9) Gili Gaya, *Elementos*, pág. 100 による。
- 10) 多くの説のうち、Jespersen, Rousselot, Malmberg, Stetson などが参考になる。
- 11) Lingüística Románica, Gredos 1970.

- 12) この様なことは、Saussure, Gili Gaya, Lausberg などは、言っていない。
- 13) Elementos., pág. 99.
- 14) Gramática de la lengua castellana, pág. 30. Sopena, 1970.
- 15) Lausberg, 141頁による。
- 16) ここでの筆者の『アクセント』と Gili Gaya の *su intensidad* は同一でないことは明かであるが、この差異は大きな問題にならない。
- 17) Phonétique générale et romane, Mouton, 1971.
- 18) Estudios Hispánicos, vol. III, 大阪外国语大学西語研究室, 1973.
- 19) Manual de pronunciación española pág. 111, Madrid, 1971.
- 20) ibidem pág. 112.
- 21) Juan de Valdés, Diálogo de la Lengua, pág. 72 で *tomá, comprá, comé* は正しくないが実際に行われていると言っている。
- 22) Malmberg, 上掲書391頁による。
- 23) Burgos の方言には、*usted* > *utté*, *está* > *ettá* もあるらしい。
- 24) 図では開度が一緒の如く書いてあるが、繁雑さを避ける為であることは前に述べたが、勿論、r よりも R の聴覚印象度は強い。
- 25) 口蓋子音の生成についての考察, Estudios Hispánicos vol. III.
- 26) 学報本号に中岡省治氏の部分訳がある。
- 27) pág. 78. 『Escrivo como hablo』だから、発音の記述に関しては信用できるものである。
- 28) Manual de Gramática Histórica Española, pág. 110. Madrid, 1968.
- 29) Diálogo. pág. 68.
- 30) ibidem pág. 80.
- 31) Ortografía. pág. 19. Real Academia Española, Madrid, 1969
- 32) Diccionario Gramatical pág. 1339. Sopena 1970.